

Special Needs Education School for the Children with Autism
附属久里浜特別支援学校

Special Needs Education School for the Physically Challenged
附属桐が丘特別支援学校

Special Needs Education School for the Mentally Challenged
附属大塚特別支援学校

Special Needs Education School for the Deaf
附属聴覚特別支援学校

Special Needs Education School for the Visually Impaired
附属視覚特別支援学校

University of Tsukuba
筑波大学



巻頭インタビュー：下山直人（附属桐が丘特別支援学校校長）

児童生徒が好きになったことが、形を変えて豊かに広がっていく

大学の附属校としては国内唯一の肢体不自由対象の特別支援学校である附属桐が丘。
今回はその附属桐が丘の校長である下山直人先生に、ご自身の事や肢体不自由教育についてお話を伺いました。

巻頭インタビュー

先生のこれまでのご経歴を教えてください。

私は青森県等の特別支援学校等で教員を20年ほど務め、その後、県教育委員会の指導主事を経て、文部科学省の特別支援教育調査官を8年間務めました。文部科学省では全国の特別支援学校の調査や学習指導要領をはじめとした業務に携わりました。その後、筑波大学に着任と同時に附属久里浜特別支援学校に校長として6年間勤務した後、附属桐が丘特別支援学校の校長になり、この春で2年となります。

教育職と行政職の両方をご経験されているんですね。

教員になって最初の特別支援学校（知的障害）では小学部を担当し、活発な児童達と戸外遊びなどで楽しく過ごしました。その後、中学部に移り、畑での作業や山での開墾等、体力勝負の日々でした。

指導主事のときには巡回での就学相談を担当し、県内の隅々まで行きました。中心部から離れた地域では特別支援学校の情報が少なかったこともあり、保護者からの期待は大きかったことを覚えています。現場を離れた行政職でしたが、就学相談では保護者や子どもと接する機会が多く、よい経験でした。



附属桐が丘特別支援学校のことについてお聞かせください。

附属桐が丘は、大学附属として国内唯一の肢体不自由を対象とする特別支援学校です。「自己の生き方を探求していく人間の育成」を目指し、教職員が丸となって日々努力しています。

附属桐が丘では長年の研究成果を生かして、3つの取組を全国に向けて推進しています。第1は、「遠隔合同授業」です。全国の特別支援学校等では、児童生徒の障害の状態や発達の段階等が多様なために、少人数での授業が多くなりがちです。そこで、児童生徒が多様な意見に触れて自己の考えを深めるために、学校同士をオンラインでつなぎ、合同で授業を行う取組をしています。附属桐が丘では現在、12の学校と遠隔合同授業を実施し、着実に成果を上げています。さらに、遠隔合同授業の拠点となるべく、HPに「遠隔合同授業マッチングサイト」を立ち上げたところです。

第2は、「知的障害を併せ有する児童生徒の教科指導の実践」です。障害の重い児童生徒に対して、どのように国語や音楽、体育等の教科指導を展開していけばよいのか、教科を学ぶ本質的な意義を追究し、児童生徒に育てたい力を明確にしていこうという実践を行い、成果を発信しています。

第3は、「自立活動の指導」についての発信です。附属桐が丘では自立活動の指導の在り方や指導法等について全国に発信してきました。次年度は、長年の蓄積した研究成果を書籍としてまとめる予定です。



肢体不自由教育のやりがいについて教えてください。

児童生徒がそれぞれに成長する姿を見て、喜びを感じられることですね。肢体不自由教育の現場では、様々な発達段階の児童生徒が学習をしています。その中で、例えば障害の重い児童生徒が首を起こしてくる姿や何かをじっと見つめる様子、言葉が生まれてくる過程等に立ち会えたとき、肢体不自由教育に携わる楽しみを実感します。また、学年に応じた学習をする児童生徒が、学習や生活での出来事を自分なりに捉えて、気づいたことを話してくれたときにも感動を覚えます。

発達は縦方向の伸びのように理解されますが、横に広がるという考え方もあるのではないのでしょうか。児童生徒が好きになったことが、形を変えて豊かに広がっていくという教育のあり方が大切だと思います。

特別支援教育連携推進グループに対して、一言お願いします。

附属学校の役割は「蓄積した成果を学校の中だけで終わらせる」ことではなく、「外に向けて発信する」ことだと思います。グループには、附属学校の成果を集め発信する先頭集団の役割を期待します。この「SNE-T」やデータベース事業、書籍等を通じて、各校の取組を様々な形で発信し続けていってほしいです。



おわりに

真剣な眼差しで、肢体不自由教育の現在や未来について語られる一方で、児童生徒の話になると柔らかな表情で穏やかな笑みを浮かべる下山先生。休日には、趣味のランニングやカヌーでリフレッシュされているとのことでした。

「もう一度学級担任をすることが出来たら？」という問いには、「発達段階が初期の児童生徒達を担当したいですね。ゆっくりと育てていきたい。」と答えが返ってきました。児童生徒の可能性を伸ばし育む教育の実現に寄せる思いや、教育の本質を問い直し追究しようとする気持ちが伝わり、後進の私たちに指導の意義を考えさせてくれるような御示唆もいただきました。

（聞き手：竹田 恵 / 敬称略）



附属学校実践紹介

附属学校の日常的な実践の中には、素晴らしい取り組みがたくさんあります。

生涯学習を見据えた英語科指導

～附属聴覚特別支援学校中学部廣瀬先生の実践～

山縣 本校の生徒たちはそれぞれ、聞こえない、または聞こえにくい、という聴覚障害をもっていますね。英語という教科の中では、聞いたり話したりする活動も重視されることと思いますが、授業の中ではどのように取り組まれているのでしょうか。

廣瀬 まず、本校の生徒たちについて言えば、中学部に入学するまでの期間に、それぞれが自分なりに聴覚を活用した生活や学習を積み重ねてきている、ということが言えます。ですので、英語の授業の中でも、文字などの視覚情報の提示をしつつ、併せて聴覚を活かすことも大事に考えて進めています。



附属聴覚特別支援学校中学部教諭
廣瀬 由美 教諭



山縣 聞く活動や話す活動も大いに取り入れている、というわけですね。

廣瀬 はい。入学前から聴覚を活用してきたこの生徒たちにとっては、むしろ音声と結び付けた学習はとても有効だと考えています。私が発音して、口の形も見せて、聞かせます。発音の仕方を言葉で説明すればある程度真似て言うことができますし、馴染みのない英語にカタカナを併記することで発音の大体をイメージすることもできます。「その発音は英語っぽいね！」などと大げさに褒めて盛り上がることもあります。ただし、聞こえにくさのある生徒ですから、正確な発音や聞き分けを求めているわけではありません。声を出して言ってみる、そして日本語にはない音があることを知ったり、日本語と違う発音の雰囲気を楽しめたりできれば OK だと思っています。あとは、一般教養、という側面もありますね。

山縣 一般教養、と言いますと？

廣瀬 外国語の発音を実際に言い分けたり聞き分けたりできなくとも、知識として知っていることは大きいと思うんです。大人になった頃、「英語のあの発音、“th”てなかなか苦労したよね」といったようなたわいない会話も、実体験をふまえて身近な人と共有できるといいな、と思うんです。

山縣 生徒の将来の姿も思い描いていらっしゃいますね。

廣瀬 学校を卒業したのち、聞こえにくさのある人が英語を学ぼうとするとき、学ぶ場・学ぶ機会については、聞こえる人と同じようにチャンスがあるとは考えにくいでしょう。生徒がのちのち英語に限らず外国語を学びたいと思った時に活用できるような基礎知識を身につけさせたい、とも考えています。

山縣 聞こえにくさに配慮した英語の指導を受けられる場として、学校時代は貴重なものと言えますね。

山縣 先生が日頃から心がけていることを教えてください。

廣瀬 生徒のことばの力全般を伸ばすことですね。生徒の雑学知識を増やし、特にカタカナの言葉に対する感度が高まるように意識しています。ゲームやYouTubeなどはカタカナ語にあふれていますが、こうした生徒の興味関心が高く身近な分野のカタカナ語は、英語学習へつながりやすい面があるんです。「ゲーム機のコントローラーに R、L って書いてあった！ライト、レフトのことだね！」と生徒から言ってくることもありますね。生徒の興味関心に日頃から注意を払い、学習に興味を持てるように、また、英語を学ぶ意味を感じられるようにしたいと思っています。

* * * * *

「英語科の教師である前に私は聾学校の教師」と廣瀬先生。英語という教科の中にとどまらず、生徒の実態を踏まえ、ひろい目でその育ちを見つめる廣瀬先生には、明るい頼もしさが感じられます。

（聞き手：山縣浅日／敬称略）



特別支援教育連携推進グループ 文部科学大臣優秀教職員表彰（教職員組織）

「附属特別支援学校群の教育実践や研究成果をもとに『特別支援教育 教材・指導法データベース』を作成公開し、障害児教育全般に対し大きく貢献している」という理由で、当グループが令和2年度の文部科学大臣優秀教職員表彰（教職員組織）を受けました。

表彰理由に挙げられております「教材・指導法データベース」は、現在の特別支援教育連携推進グループが特別支援教育研究センターの時代に立ち上げられたものであり、今回の表彰はセンター教諭だった先生方、障害科学域の先生方のご尽力によるところが大変大きいと思います。そして何より、現在430を超える教材・



指導法の集まるデータベースに成長していったのは、日々素晴らしい実践に取り組まれている附属学校の先生方のおかげに他なりません。

今回、この表彰の栄誉をグループが代表してお受けいただきましたが、これは筑波大学人間系障害科学域、附属特別支援学校、当グループに関わってくださっているすべての皆様にいただいたものだと思います。

今後、教材・指導法データベースをさらに発展させていくだけでなく、様々な筑波大学の特別支援教育に関する取り組みをグループは発信していきたいと思います。皆様の変わらぬご支援のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

「授業を豊かにする 筑波大附属特別支援学校の教材知恵袋【自立活動編】」 発刊

当グループでは、「筑波大学 特別支援教育 教材・指導法データベース」を運用し、附属特別支援学校5校の授業で活用されている教材・指導法をweb上で発信しています。このたび、データベース上に掲載されている教材の中から、自立活動の視点で活用できる教材を選集した書籍「授業を豊かにする筑波大附属特別支援学校の教材知恵袋【自立活動編】」を出版いたします（3月下旬発刊予定）。

障害種を超えて活用できる教材、各障害種の中で受け継がれ使用されてきた教材を、指導の目的や内容、教材の特徴、具体的な指導例等と一緒に、分かりやすく紹介しています。さらに、読者の参考となるように、教材の材料や作り方、市販品については入手先の情報等も掲載しています。書籍を手にとられた先生方が、掲載されている教材を参考にしながら、適宜、担当されているお子さんにあわせて、アレンジしながらご活用いただける内容になっています。

そして教材の紹介と一緒に、附属特別支援学校5校の自立活動の様子や、養護・訓練から自立活動への変遷、自立活動Q&A等、初めて自立活動を担当される先生方、自立活動について一から学びたい先生方にも道しるべとなるような情報を掲載しています。

ぜひ日々の指導に本書をご活用いただければ幸いです。



出版社：ジヤース教育新社
定価：本体2,000円＋税
編著：筑波大学特別支援教育連携推進グループ

令和2年度 現職教員研修プログラム 「専門性向上コース」

令和2年4月1日～令和3年3月31日の1年間、北海道札幌あいの里高等支援学校 鐘ヶ江 真知（かねがえ まこと）先生が、本グループで研修されました。コロナ禍において、当初の計画どおりにはいかないことも多い中、その都度、実践可能なことを模索したり、時期を調整したりしながら、附属学校での実践実習や講義、附属学校参観、大学の授業（オンデマンド）の聴講、本グループでの講義・演習、また、自主研修として、文献研究、国立特別支援教育総合研究所での研修、並びに東京・神奈川の学校や福祉機関、就労支援機関の見学等を進めることができました。



附属大塚：特別活動「係活動について考えよう」自宅から参加している生徒にモニター越しにプリントを提示し声を掛けている様子です。鐘ヶ江先生にとって、初めてのハイブリッド型の授業でした。

テーマ研究では、勤務校の生徒の実態や学校の課題、また卒業生の就労後の課題等を解決するための方策を追求していきました。様々な研修を通して、高等支援学校教育の役割と課題、北海道の特徴等を見詰め直し、また、高等支援学校の生徒たちの実態から、生徒一人一人が学校を居場所と感じ、意欲的に学んでいくためのスタートカリキュラムの必要性にたどり着きました。生徒一人一人の社会性の発達・成長と、そのために自らが人と関係をつくり機能的な社会的集団を構築し変化させていく力の二つの視点から研究をまとめました。

本研修プログラムの大きな特徴である実践実習では、6、7月の約2か月間、附属大塚特別支援学校中学部2年生の学級を中心に、11、12月の約2か月間は、附属久里浜特別支援学校小学部3年生を中心に、毎日、児童生徒と学校生活を共にし、担任の先生たちとともに授業計画の立案や実践、評価・改善、教材研究等を進めました。



附属久里浜：お話し遊び「さつまのおいも」おいもに扮した鐘ヶ江先生にみんな集まってきています。毎日、楽しく遊んでもらい、最終日には、お別れが悲しくて泣き出す児童もいました。

それぞれの学校において、鐘ヶ江先生自身が児童生徒たちと深く関わることで、関係が築かれることや、信頼関係の上で授業がなされ児童生徒たちの学びが深まるという体験を通して、教師の基本的な姿勢は、子供たちの年齢が上がっても変わらないと結論付けられました。生まれてから死ぬまでという生涯発達の時間軸に、高等支援学校の生徒たちの社会性の発達を位置付けたスタートカリキュラムが完成しました。

北海道では、このカリキュラムが実践、評価・改善され、今後、カリキュラム・マネジメントとしての成果発信も期待しています。

editorial Postscript

編 集 後 記

暖かな春の訪れと共に、皆様のもとに「SNE-T」第10号をお届けいたします。本号も、筑波大学附属特別支援学校5校の取組や当グループの事業などについてご紹介いたしました。本年度は全国の先生方と同じように、私たちにとってもこれまでに経験したことのない1年となりましたが、その中で少しでもより良い情報を多くの先生方にお知らせしたいと努めてまいりました。リニューアルした前号には、多くのご好評のお声をいただき、ありがとうございます。新年度も、「SNE-T」と私たち特別支援教育連携推進グループをどうぞよろしくお願いいたします。（竹田 恵）

SNE-Tの記事を書くために色々な先生方とお会いしてお話を聞かせていただくと、どの先生も本当に素敵な方が多く、何かに熱量を持ってお話しくださる姿は大変魅力的です。実際には誌面に載っている何倍もの量のお話をしてくださり、誌面の関係上、残念ながらカットせざるを得なかった面白いお話もたくさんあります。写真も誌面で掲載されるのは2～3枚ですが、実際には200～500枚ほど撮っています。まだまだ文章も写真も力量不足で、先生方の魅力を十分にお伝えし切れていないかもしれませんが、ほんの少しでもみなさんに、先生方のキラリと光る人間的な魅力が伝わっていたら嬉しいです。（厚谷秀宏）



SNE-T

Group for the Special Needs Education, University of Tsukuba

エスネット10号(通巻 第58号) 2021年3月25日発行
発行 / 編集 : 筑波大学附属学校教育局特別支援教育連携推進グループ
〒112-0012 東京都文京区大塚 3-29-1
電話 : 03-3942-6923・6937 FAX : 03-3942-6938
e-mail : snerc@human.tsukuba.ac.jp
<http://www.human.tsukuba.ac.jp/snerc/>

©2021 筑波大学特別支援教育連携推進グループ(本誌記事の無断転載を禁じます)